

International Bulletin
Fraternitas
Ordo Fratrum Minorum

385

Volume LIX | 22nd July 2026

特集号

アンダー・テン
幕屋の集会

ASSISI 2026



INDEX

アンダー・テンの 幕屋の集会の歴史.....	3
ポルチウンクラで開幕した アンダー・テンの幕屋の集会....	4
兄弟愛の光の中における召命....	6
権威の奉仕、福音宣教、 そしてフランシスカンの 記憶によって彩られた一日.....	8
アンダー・テンの集会における 祈りから兄弟的ケアへ.....	10
デジタル世界、人工知能、 および共通の家のケアに関する ラウンドテーブル・ ディスカッション.....	12
アシジで閉幕した アンダー・テンの集会.....	14
第6回 アンダー・テンの幕屋の集会 最終メッセージ.....	17



EDITORIAL

親愛なる兄弟たちへ

「フラテルニタス」のこの特別号は、聖フランシスコの過越の第8百年祭の中核をなす2026年7月にアシジで執り行われた、「小さき兄弟会 第6回アンダー・テンの兄弟たちの幕屋の集会」の記憶を集めたものです。あの日々の体験は、フランシスカンの召命が福音へと立ち返り、兄弟愛の中に自らの具体的な生活様式を見出すとき、いかに生き生きとしたものであり続けるかを私たちに思い起こさせてくれました。

参加した兄弟たちは、自らのEntity（管区・分管区等）の喜び、葛藤、問い、そして希望を携えて集まりました。彼らは祈り、権威の奉仕、人間の総合的なケア、メンタルヘルス、未成年者および弱い立場にある成人の保護、福音宣教、デジタル世界、人工知能、そして私たちの共通の家のケアについて考察を深めました。これらの多岐にわたるテーマの中で、一つの共通の召命が浮かび上がりました。それは、人道性を守り、素朴さをもって福音に仕え、より真実で、より自由で、より福音的な人間関係を築くことです。

また、この集会は、当修道会の国際的で若々しく、多様性に富んだ素顔を示してくれました。異なる言語、文化、感性が、障害としてではなく、賜物として出会ったのです。

したがって、今回の「フラテルニタス」特別号は、単なる出来事の記録にとどまらず、私たちが歩みと識別を続けていくための「記憶」を保存することを目指しています。アシジで起こったことは、アンダー・テンの兄弟たちだけのものではないからです。彼らの問い、直観、そして希望は、修道会全体の生活と使命に対して問いを投げかけているのです。

参加者たちによる最終メッセージは、私たちの生活の刷新が、自らの兄弟会において福音を可視化する日々の選択を通じても築かれるということ、現実主義と希望をもって表現していました。ノスタルジーに陥ることなく源泉へと立ち返り、より簡素でより本物の兄弟愛を体験するようにという招きが、力強く響き渡りました。それは、すべての兄弟にとって「家」であり、自らの脆弱さ、疲労、そして傷さえも受け入れられる「安全な空間」となる兄弟愛です。

同様に、この集会は、私たちの使命が謙遜で寄り添う現存を必要としていることを想起させました。「小さき者（マイノリティ）」として福音を宣べ伝えることは、神の民に耳を傾け、伴走し、共に歩むことを意味します。デジタル文化という新しい空間、人工知能の発達、そして共通の家のケアもまた、人間、兄弟愛、そして福音を常に中心に置く責任ある識別とフランシスカンとしての現存を求めています。

この誌面、画像、動画を通して、アシジで分かち合われた体験を皆様が追体験し、その実りが皆様の兄弟会の生活へと広がっていくことを願っております。良い読書となりますように。

Br. Byron A. Chamann Anléu, OFM
Director



アンダー・テンの 国際幕屋の集会の歴史 1995年から現在まで



WWW.OFM.ORG

「アンダー・テンの国際幕屋の集会」は、世界中から荘厳誓願宣立10年未満の兄弟たちを集めるために、小さき兄弟会総長によって招集される集いである。修道会の草創期に聖フランシスコと兄弟たちが体験した「幕屋の集会（むしろの総会）」に着想を得たこの集いは、若い兄弟たちに対し、自らの召命と使命について兄弟愛、祈り、内省、そして分かち合いを行う特権的な場を提供している。

各回において、修道会の様々な諸管区協議会およびEntityからの代表者が総長および総理事会と出会い、フランシスカン生活の喜びと課題を分かち合い、刷新の道を特定し、修道会の統治のための提案を策定する。この集会は、新しい世代の兄弟たちの中で刷新され続けるフランシスカンのカリスマの活力と普遍性を証しするものである。

今年に先立ち、本修道会はこれまで5回のアンダー・テンの幕屋の集会を開催してきた。

COMPOSTELA
🔗 St James of
Compostela (Spain)
September 1995



🔗 Canindé (Brazil)
July 2001



🔗 The Holy Land
July 2007



🔗 Guadalajara and
Mexico City (Mexico)
June 2012



🔗 Taizé (France)
July 2019

#UNDERTENOFM



ポルチウンクラで開幕したアンダー・テンの幕屋の集会

全世界の若い兄弟たちが兄弟性のしるしのもとに集まる



WWW.OFM.ORG

2026年7月5日、聖フランシスコが最初の兄弟たちを迎え入れ、自らの地上での歩みを締めくくりたいと願ったその場所において、小さき兄弟会第6回アンダー・テンの幕屋の集会の幕が開かれた。五大洲から集まった荘厳誓願宣立10年未満の兄弟たち135名が、総本部の兄弟たちと共にポルチウンクラに集まり、傾聴と識別、そして国際的兄弟性の時間を過ごした。

開幕日は、フランシスカンの原点についての生きた記憶を中心に行われた。最初の歓迎のひとときのあと、プログラムは導入、歓迎のあいさつ、フランシスカンの祈り、そしてドームス・パチスからサンタ・マリア・デリ・アンジェリ大聖堂への行列へと進んだ。兄弟たちは出身国の国旗を掲げ、今日この修道会を構成している民族、言語、文化の多様性を目に見える形で示した。

開幕のあいさつにおいて、副総長の兄弟 Ignacio Ceja, OFM は参加者を歓迎し、この集会は単なる修道会のカレンダー上の行事ではなく、「兄弟性の実験室（試練の場）」であると想起させた。そして、聖フランシスコの言葉「主は私に兄弟たちを与えてくださった」に従い、与えられた召命と兄弟という賜物に感謝してこの日々を過ごすよう

兄弟たちを招いた。国際的な文脈において、同氏は個々人が自らの言語グループや諸管区協議会の中に閉じこもるのではなく、コミュニケーションにおいて創造性、素朴な身振り、微笑み、そして忍耐強い傾聴が求められるときであっても、他国の兄弟たちとの出会いへと自らを開くよう励ました。

開幕の感謝の祭儀は兄弟 Ignacio Ceja, OFM が司式し、説教の中でポルチウンクラは単なる記憶の場所ではなく、兄弟たちが自らの生活と使命の意味を再発見するために立ち返るよう召されている源泉であると想起させた。フランシスコが自らの召命をより深く理解し、最初の兄弟たちを迎え入れ、彼らと共にどのように主により良く仕えるかを模索したのも、まさにこの場所であった。

イエスの「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。わたしがあなたを休ませてあげよう」という招きについてコメントしながら、兄弟 Ignacio は若い兄弟たちが心に抱えている現実の重荷について語った。それは、忠実への願い、宣教の課題、兄弟的生活、司牧上の責任、文化的変容、戦争、そして物質的・精神的な多くの形態の貧困である。福音を宣べ伝える者

となる前に兄弟たちは弟子であり、何かの責任者となる前に誰かによって呼び集められた兄弟なのだ、同氏は想起させた。ポルチウンクラは「小さき者たちの聖地」として提示された。フランシスカンのカリスマの核心である「小ささ (Minority)」は、弱さではなく自由である。つまり、すべては恵みであり、神に素朴に身を委ねる術を知っている者たちを通して神の国は成長するという意識である。競争、極進化、暴力、そして戦争によって特徴づけられる世界において、フランシスカンのカリスマは際立って現代的な意味を持ち続けている。このため、兄弟 Ignacio は、言葉だけでなくその生き方を通して平和を宣べ伝えることのできる男女を世界は必要としているのだと強調した。

午後は、ウクライナの兄弟たちへの兄弟的訪問から帰国した総長の兄弟 Massimo Fusarelli, OFM が、「フランシスカン百年祭 (1226~2026 年)」の中核にこの集会を位置づけながら、第6回アンダー・テンの幕屋の集会の導入として参加者に向けて語りかけた。総長は修道会のあらゆる角から集まり、繁栄している Entity や疲弊している Entity の物語、宣教の体験、希望、そして傷を持ち寄った兄弟たちにあいさつを述べた。しかしポルチウンクラにおいては隔たりが取り払われ、全員が修道会の誕生を象徴する小さな教会の周囲で、単純に「小さき兄弟」へと戻るのである。

兄弟 Massimo は、「幕屋の集会 (Chapter of Mats)」という名称の意味を想起させた。それは過去へのノスタルジーではなく、現在を導く記憶の問題なのである。幕屋 (むしろ) は、ポルチウンクラの周りに集まった、貧しく、複雑な組織を持たず、福音を中心とし兄弟愛の絆で結ばれた草創期の兄弟たちを想起させる。今日この名称を選ぶことは、生活と言葉をもって福音を宣べ伝えるために、今一度福音に耳を傾ける修道会を望むことを意味する。

続いて総長は、聖フランシスコの『遺言』の光のもとに、アンダー・テンの兄弟たちの体験を読み解いた。荘厳誓願宣立後の最初の10年間は、初期養成の理想主義が日常生活の現実主義とぶつかり合うデリケートな段階である。幻滅、孤独、人間関係や構造における疲弊が生じることがある。それにもかかわらず、若い兄弟たちの問いの中には、不満ではなく何よりも「本物であること」への探求が見出されると同氏は指摘した。それは、奉仕として生きられる権威、世代間の真の対話、脆弱さへの誠実な伴走、デジタル大陸や世界の周縁における福音的現存への願いである。

講話の中で、兄弟 Massimo は歩みの地平とし

て、聖フランシスコの3つの遺産を提示した。「貧しい人々への慈しみと被虐のキリストへの愛」、「貧くとも実り豊かな地土としての教会とエウカリスティア」、そして「平和の源泉としての権力を持たない兄弟愛」である。これらの遺産は、議論して整理分類するためのテーマではなく、兄弟たちおよび修道会の具体的な生活の中で実を結ばなければならない種なのである。

集会は講座ではなく、参加型かつシノドス的な体験であると総長は強調した。兄弟たちは養成の受動的な受け手ではなく、自らの言葉、傾聴、そして識別を提供するよう呼びかけられた主人公なのである。アシジで熟成されるものは、2027年の聖霊降臨にベトナムで執り行われる総集会へ向けても位置づけられ、新しい世代の声が修道会全体の歩みに貢献できるようにしていく。

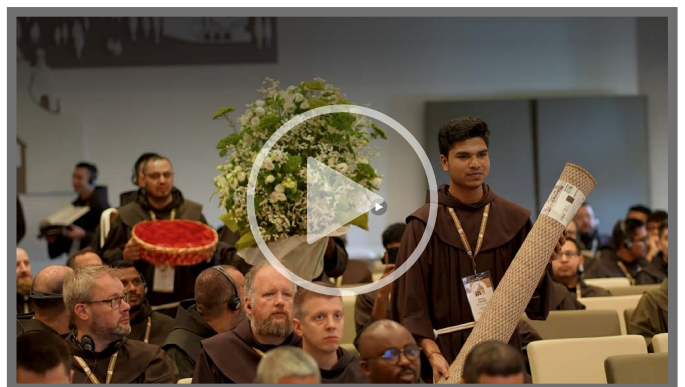
初日はグループワーク、各自の召命の物語の個人的分かち合い、利益を超えた異文化交流のタベをもって終了した。これらは抽象的なアイデアからではなく、顔、言語、記憶、そして希望の出会いから生まれる兄弟愛の具体的なしるしである。原点の場所であるポルチウンクラにおいて、アンダー・テンの集会はこうしてその歩みを始めた。すべての答えを所有していると主張するのではなく、聖フランシスコの種を新たに芽吹かせるよう召されたフランシスカン世代に対して精霊が今日何を語っているのかを、共に聴き取りたいという願いをもって進んでいく。

Read the homily of Br Ignacio Ceja:

[Italiano](#) - [English](#) - [Español](#)

Read the address of the Minister General:

[Italiano](#) - [English](#) - [Español](#)



#UNDERTENOFM



兄弟愛の光の中における召命

聖フランシスコのゆかりの地に集うアンダー・テンの兄弟たち



WWW.OFM.ORG

7月6日（月）、アンダー・テンの幕屋の集会の期間中、兄弟たちはフランシスカンゆかりの地における傾聴、識別、そして生きた記憶の行程へと導かれた。朝の祈りと「あなたがたは皆兄弟である。フランシスカンのアイデンティティ」というテーマでのレクティオ・ディヴィナの後、参加者たちは個人の内省の時間に入った。そこでは、2026年のアンケート調査および事前集会の要約の光のもとにアンダー・テンの兄弟たちが直面している困難、希望、課題についての対話が行われ、また兄弟愛の光の中に自らの召命を理解することを目的としたグループでの霊的会話が行われた。

兄弟 Giuseppe Buffon に委ねられた午前の内省は、福音の言葉「あなたがたは皆兄弟である」を出発点として、フランシスカンのアイデンティティの核心を再び中心に据えた。発表者は、フランシスコにとって兄弟愛とは単なる共同体の理想ではなく、福音的生活の具体的な形態であると想起させた。それは出世主義がなく、優越感の主張もなく、常に学びと回心へと開かれた道なのである。「小ささ（Minority）」は静的な考え方では

なく、毎日生きられるべき関係性であると同氏は強調した。

さらに兄弟 Buffon は、兄弟愛を、歴史を越えて今日の課題にも語りかけることのできる力として指摘した。「小さき兄弟」であることは、他者のために何かをするためだけではなく、他者と共にいることを意味する。兄弟愛とは抽象的なアイデアではなく、人間性と福音の具体的な媒介であるため、真実で、近く、相互的な関係性を守ることが意味するのである。

その後、グループでの内省へと続いた。午後、兄弟たちは様々なフランシスカンゆかりの地（ポルチュウクラ、サン・ダミアーノ、カルチェリ修道院）へと出発した。各言語グループは、内省、対話、ガイド付き見学、個人の祈り、感謝の祭儀、そして夕の祈りを含む独自の行程を辿った。この巡礼において、それらの場所は単なる過去の記憶ではなく、今日のフランシスカン召命の形を認識するための傾聴の空間となった。

英語のグループは、「聖フランシスコの過越の

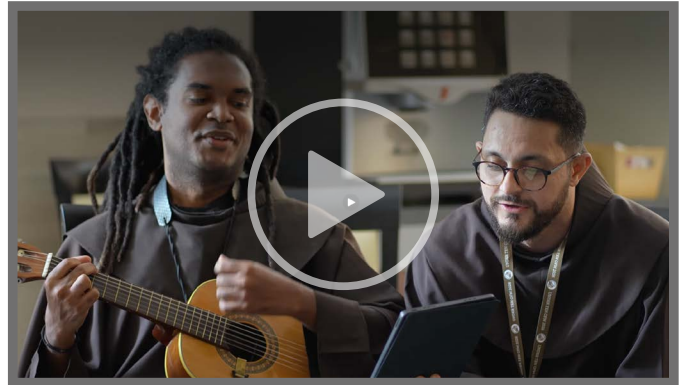
奥義」というテーマでポルチウクラを訪問した。兄弟愛の原点を守るその場所において、黙想はフランシスコの誕生と帰天（過越）を共に理解し深めるよう招いた。ポルチウクラは修道会のゆりかごであると同時に、フランシスコが地上から死へと移行した場所でもある。ここでフランシスコは霊的に生まれ、ここで福音的召命を受け入れ、そして1226年10月3日の夜、ここで自らの命を主へと委ねた。

総長である兄弟 Massimo Fusarelli の指導による内省は、「賜物」の論理を強調した。「自分を愛し続けて、最後までに愛し合わされた」イエスのように、フランシスコもまた死に近づいたとき、恐れから自らの中に閉じこもるのではなく、兄弟たちとパンを分かち合った。彼の帰天は物語の終わりではなく、賜物として与えられた生命の完成なのである。「兄弟たちよ、勇気を出しなさい。私にとって、そこは命の港となるでしょう」とフランシスコは兄弟たちに語ったものであった。ここから、若い兄弟たちへの希望の言葉が湧き出る。最後の言葉は死ではなく、賜物なのである。

ポルチウクラにおいて、兄弟たちは修道会の召命のマリア的側面を観想することもできた。天使の聖マリアは、与えるために受け取り、御言葉を受け入れてそれを歴史の中で肉化させる生活のモデルとなる。「2026年フランシスカン聖年」の文脈において、この場所は許し、和解、自由、そして刷新の空間として再び立ち現れ、誰もが自らの召命の中心を再発見することができる。

黙想に続く対話では、修道会のいくつかの具体的な課題が取り上げられた。召命の減少、より強

い管区間協力の必要性、新しい国際的兄弟会の可能性、フランシスカン・アイデンティティに関するより深い養成の緊急性、そして兄弟愛への召命である呼びかけを貧しくさせる聖職者主義の危険性である。これらの問いの中で、修道生活50年を迎えた兄弟 Joaquin Echeverry の証しが響き渡り、同氏は素朴に「私たちはみな兄弟です。区別と想起させた。



一日は、天使の聖マリアの兄弟会との夕食および歓談の時間をもって終了した。御言葉、ゆかりの地の記憶、そして兄弟的対話によって特徴づけられた濃密な一日の後、アンダー・テンの兄弟たちは刷新された確信を胸に刻んだ。フランシスカンのアイデンティティは、公式を繰り返すことによってではなく、福音的な関係性を生きることによって守られるのだということである。アシジから、世界が小さき兄弟たちの中に「すべての人の兄弟」となるよう召された人々を見出すことができるように、兄弟愛は約束であり課題として語りかけ続けている。



#UNDERTENOFM



権威の奉仕、福音宣教、そしてフランシスカンの 記憶によって彩られた一日

サン・ダミアーノから見る賜物、財、そして兄弟的生活



WWW.OFM.ORG

7月7日（火）、第6回アンダー・テンの幕屋の集會に参加している兄弟たちは、祈り、内省、そして聖フランシスコの生きた記憶を守る場所との直接的な接触によって形作られた一日をアシジで継続した。

朝は讃美の歌と、兄弟Jakub František Sadilek, OFM の指導による「フランシスコ生活における権威の奉仕」に関するレクティオ・ディヴィナで始まった。生活体験から汲み上げながら、同氏は支配としてではなく、兄弟たちの生活に伴走し、耳を傾け、支える奉仕として権威を理解するよう兄弟たちを招いた。その黙想において、同氏は幾つかの素朴で深いイメージを提示した。父であり、母であり、兄弟となるよう召された兄弟、まず子となることを学ぶ権威、受け入れと祈りからなる母性、そして兄弟的共同体の中で各兄弟が自らの道を模索し生きることを助ける「よい羊飼い」の奉仕である。

個人の黙想の時間の後、兄弟Sergio Massironiと共に内省が続けられ、同氏は今日の福音宣教の

アレオパゴスというテーマを展開した。聖書に登場するアンティオキアやアテネの街を出発点として、同氏は福音宣教とは戦略や権力の場所への現存に矮小化されるものではなく、福音のゆえに、さもなければ隔てられたままであるような人々を結びつけられる新しい関係性が生み出されるところではどこでも生じるものであると指摘した。キリスト者の喜びは宣教の飾りのようなものではなく、その最も深いしるしの一つであること、そして小さき者、貧しい者、排除された者こそが、内



側から生活を変容させる啓示の優先的な受け手であることを同氏は想起させた。

午前はグループでの霊的会話をもって終了した。兄弟たちは、兄弟愛を活性化させ、現代の課題に創造性、希望、そして勇気をもって応えることのできる権威を行使するために、主が自らをどのような回心へと招いているのかを自問するよう促された。それは、集会のアシジの日々に伴うシノドス的方法と連続性をなす、傾聴と識別の時間であった。

午後、参加者たちは様々なフランシスカンゆかりの地へと向かった。イタリア語グループはサン・ダミアーノを訪問した。集いは、聖フランシスコの体験から汲み上げた無償性、兄弟愛、そして経済に捧げられた、兄弟 Martin Carbajo, OFM による内省から始まった。

「行って、わたしの家を建て直しなさい」という招きをもって主が貧者の心に語りかけたその場所において、兄弟 Martin は、探求、過ち、そして脆弱さによっても特徴づけられた歩みを通して、フランシスコが神の無償性を段階的に発見していったことを想起させた。

ハンセン病者との出会いは、相互性の決定的な体験として提示された。フランシスコは重病者に近づいただけでなく、重病者によって受け入れられ、こうして関係性の新しい生き方を発見したのである。内省においては、フランシスカンの伝統において人間の偉大さは権力や効率性によって測られるのではなく、兄弟愛によって測られることが強調された。この視点から、財は賜物として循環するよう招かれており、経済は関係性、各人の尊厳、そして共同体の構築に仕えるときにその意



味を見出す。労働、貧しさ、そして金銭の使用もまた、絆を断ち切るのではなくそれを清め、共通の善へと向かわせる福音的自由の光のもとに読み解かれた。

内省の後、地元の兄弟会の兄弟がサン・ダミアーノ聖堂の導入を行い、兄弟たちがその場所の歴史と霊的意味に入るのを助けた。そこは、フランシスコが教会を建て直す召命を聞いた場所であり、クララが姉妹たちと共に主に従い福音を生きるラディカルな形態を生きた場所なのである。



#UNDERTENOFM



アンダー・テンの集会における 祈りから兄弟的ケアへ

カルチェリにおける、山から谷へ、
観想と宣教を統合する呼びかけ



WWW.OFM.ORG

7月8日（水）、第6回アンダー・テンの幕屋の集會に参加している兄弟たちは、フランシスカンゆかりの地への巡礼を続けながら、祈りと人間の総合的ケアに捧げられた一日をアシジで体験した。

一日は讃美の歌で始まり、アシジのコレッタ派クララ会修道院長であるシスター Therese Myriam の指導による「祈りと信心の精神」についてのレクティオ・ディヴィナへと続いた。クララと彼女の姉妹たちの観想的体験から汲み上げながら、内省は、祈りとは生活から切り離された時間ではなく、労働、人間関係、そして日々の忠実さを支える内なる火であることを認識するのを助けた。

シスター Therese Myriam は、「聖なる祈りと信心の精神」を消さないようにという聖クララと聖フランシスコの懸念を想起させた。祈りと労働は互いに相反するものではなく、むしろ互いを照らし合い、養い合うものである。この歩みにおいて、真の回心は自己認識から始まると同時に、自分自身で終わるものではない。それは謙遜、貧しさ、沈黙、キリストの受難の記念、そして愛に

おける忍耐へと開かれていく。信心 (Devotion) は、精霊によって点火され、キリストの傷との接触を通して清められた、全人格の神への奉納として提示された。

午前のプログラムは、コンボニ修道会士であり心理学者・心理療法士でもある Giuseppe Crea 教授による、メンタルヘルスと情緒の健康に関する貢献へと続いた。同氏の内省は、個性の多様性を脅威としてではなく、認識され、調和させられ、兄弟愛の奉仕へと置かれるべき豊かさとして見るよう兄弟たちを招いた。誰もが賜物と限界を抱えている。ある特徴が固執すると困難に変わり得るが、それが自由に受け入れられ、共同体によって伴走されるとき、召命の成長の道となり得る。

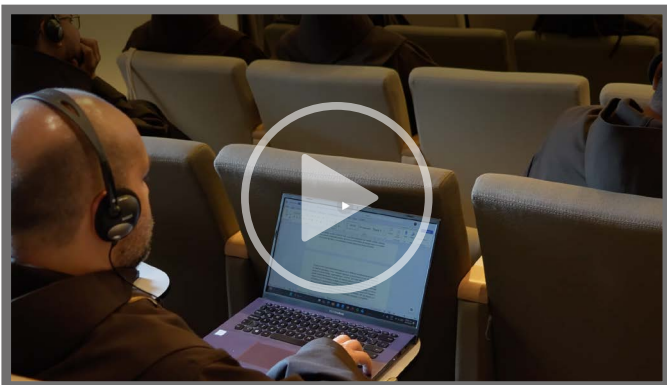
Crea教授はまた、人間的・霊的成熟の場としての関係性の価値を強調した。誰も一人では救われず、兄弟的生活は「私」から「あなた」へ、自らのものから共通のものへと忍耐強く移行し、キリストのものに向かって歩んでいくことを求めている。この地平において、兄弟的修正、傾聴、そし

て助けを求める能力は弱さのしるしではなく、ケアする兄弟愛の具体的な表現なのである。情緒もまた重要なシグナルとして提示された。それらは行動を調整し、情愛のエネルギーを提供し、自らの限界を認識するのを助ける。

午前の後半のラウンドテーブルでは、修道会内におけるセルフケア、メンタルヘルス、および未成年者と弱い立場にある成人の保護の視点から、これらのテーマが深められた。OFM未成年者等保護国際委員会の委員長である兄弟 Albert Schmucki, OFMが司会を務め、シスターTherese Myriam、Crea教授、およびOFM未成年者・弱い立場にある成人保護担当室長の兄弟 Eduard Iurii Semko, OFMが登壇した。

午後、参加者たちは3つのフランシスカンゆかりの地（ポルチウンクラ、サン・ダミアーノ、カルチェリ修道院）への最後の巡礼を行った。スペイン語グループは、沈黙、黙想、そして聖フランシスコの内なる歩みの生きた記憶の場所であるカルチェリ修道院へと登った。そこで兄弟 Carlos Salto, OFM は、「フランシスカンの交互作用：山から谷へ」という内省を提供し、小さき兄弟の生活の不可欠な次元を兄弟たちが観想するのを助けた。それは、主と共にいるために山へ登り、兄弟たち、貧しい人々、そして世界の傷と出会うために谷へと下ることである。

カルチェリ修道院において、沈黙の体験は逃避としてではなく、源泉への回帰として提示された。山は立ち止まり、耳を傾け、神に見つめられることを許し、自らの心を整える必要性を想起させる。谷は、真の祈りが常に宣教、兄弟愛、秩序、そして奉仕へと連れ戻すものであることを想起させる。フランシスカンの交互作用は、観想と行動を切り離すのではなく、それらを実り豊かな対話の中に保持する。祈りの時間がなければ宣教は空洞化するリスクを冒し、具体的な生活へと下っていかなければ観想は自らの中に閉じこもり得る。



兄弟 Carlos Salto の内省は、カルチェリの視点から一日全体を読み直すことを可能にした。祈りと信心の精神、メンタルヘルスと情緒のケア、未成年者と弱い立場にある成人の保護、そして兄弟的生活は、この交互作用の中に共通の点を見出す。すなわち、自らの兄弟たちと共に留まるために、神の前に留まることを学ぶことである。急ぎ、疲労、そして多様な司牧的要請によって特徴づけられる時代において、アンダー・テンの兄弟たちは沈黙と言葉、人々のいる孤独と交わり、撤退と宣教を統合することのできる福音的リズムを開発し保護するよう招かれた。

さらに、感謝の祭儀の举行や、個人の祈りの時間を交えたガイド付き見学が行われた。カルチェリの聖堂において、各人が神と他者によってケアされることを受け入れるとき、兄弟愛は強化されるのだということを兄弟たちは体験することができた。アシジの山から、集会は晴れやかな心をもって谷へと戻るよう呼びかけられた。すなわち、耳を傾け、仕え、自らの生活を福音が兄弟愛という共通の家を修復し続ける場所とする準備を整えるのである。



デジタル世界、人工知能、および共通の家のケアに関する ラウンドテーブル・ディスカッション

2026年7月9日



WWW.OFM.ORG

7月9日（木）、アンダー・テンの幕屋の集会の6日目は、各言語グループに分かれて捧げられた感謝の祭儀（ミサ）で始まり、集会のプロセスを支える兄弟的精神を祈りの中で養った。その後、兄弟 Juan Isidro Aldana Maldonado, OFM が「2027年総集会」の準備についての発表を行い、その集いに至る歩みの地平と方法論の全体像を提供した。総集会は2027年にベトナムにおいて、シノドス的、兄弟的、霊的な重点を持ち、多様な文脈や文化から自らの生活と使命を見つめるよう修道会を招くアプローチをもって開催されることが報告された。

午前を中心となったのは、総本部JPIC委員長の兄弟 Daniel Nicolas Blanco, OFM が司会を務めたラウンドテーブル・ディスカッションであり、宣教の新しい最前線と密接に結びついた3つのテーマ「デジタル世界」、「人工知能」、および「共通の家のケア」に捧げられた。それぞれ異なる方法において、ツールや動向を理解することだけでなく、フランシスカンのカリスマへの忠実さと人々の現実的な問いへの留意をもって、今日ど

のように福音を宣べ伝えるかを識別することが課題であることが強調された。

デジタル福音宣教に関する内省において、デジタ



ル環境は単なる道具へと矮小化されることはできず、多くの人々が生活し、意味を探求め、伴走されることを望んでいる「場所」であることが強調された。したがって、理解しやすい言葉、意味のある現存、そして近しさと傾聴を優先するスタイルをもって福音を伝えることのできる、本物の

「デジタル文化へのインカルチュレーション」が提案された。

人工知能に関する発表では、これらの技術が引き起こす人類学的、社会的、倫理的課題、特に民主的性格の生活、権力の分配、および労働の意味に関して焦点が当てられた。決定的な問いは技術的なものだけではなく道徳的なものであることが想起された。責任は人間の手に残されており、このため基準を形成し、評価、透明性、および修正の文化を育むことが必要である。

共通の家のケアに関する内省は、社会環境危機を「大地の叫びと貧しい人々のアペール」の文脈の中に位置づけ、あらゆる首尾一貫した応答の基礎としての「心の回心」への呼びかけを強調した。また、フランシスカンの伝統に根ざした実践と感性を回復することの重要性、ならびに典礼、霊性、および奉仕を共通の家のケアへと統合するプロセスを祝い支えることの価値が強調された。

対話において、人工知能の素朴で思慮深い使用の必要性も指摘され、そのエネルギーおよび環境への影響に留意し、「より少ないことは、より豊かなこと (less is more)」というフランシスカンの原則と調和させることが確認された。

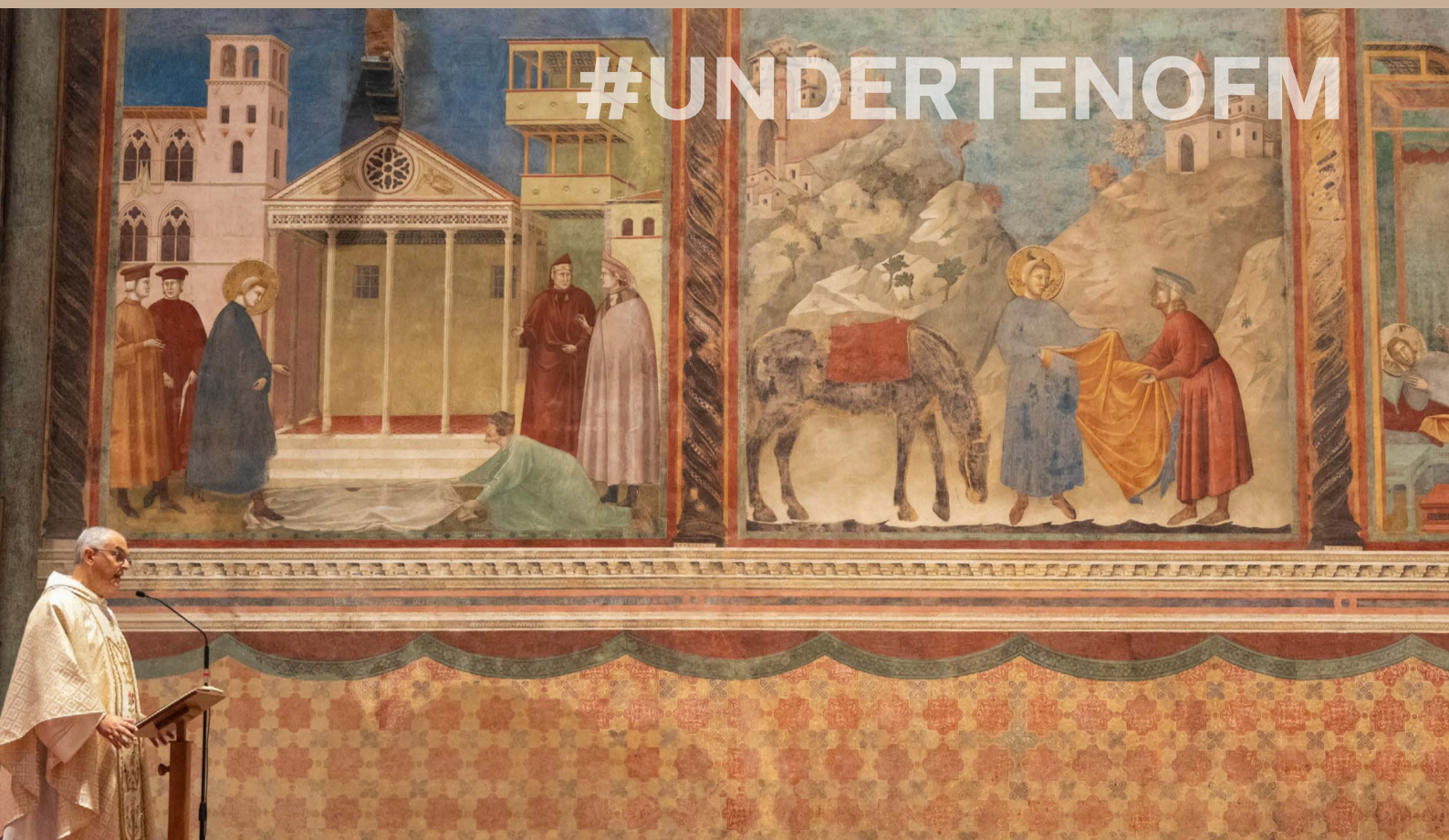
コーヒーブレイクの後、兄弟たちは祈りと兄弟愛の精神のうちに共鳴と貢献を分かち合うために計画された方法論に従い、諸管区協議会ごとの霊的会話を続けた。一日のプログラムには午後の自由時間も含まれており、グループ見学で見ることが



できなかったフランシスカンゆかりの地を個別にできなかったフランシスカンゆかりの地を個別に訪問する機会として捉えられた。カリスマの生きた記憶と内なる開かれを強化する、観想、沈黙、そして感謝のための適切な時間となった。



#UNDERTENOFM



アシジで閉幕したアンダー・テンの集会 兄弟愛から再び始まる呼びかけと共に 修道会の生きた現在を守るために派遣される



WWW.OFM.ORG

On Saturday, July 11, the brothers taking part in the VI Under Ten 7月11日（土）、第6回アンダー・テンの幕屋の集会に参加している兄弟たちは、祈り、傾聴、識別、そして国際的兄弟愛の具体的な体験によって彩られたこの日々の中での歩みを、アシジにおいて締めくくった。

一日は聖フランシスコ大聖堂への出発で始まり、そこで総長である兄弟 Massimo Fusarelli, OFM が司式する「アシジの聖フランシスコの祝日のミサ」が捧げられた。フランシスコの過越の生きた記念の場所において、兄弟たちは小さき者たち、十字架、そして喜びの福音の光のもとに、集会の歩みを読み直すよう招かれた。

説教の中で総長は、父は自らの事柄を「小さき者であり続ける者たち」に現されることを想起させ、各大陸から集まった最初の数年を歩む兄弟たちに向けてこの言葉を語りかけた。「あなたがたこそが、今日のそれらの小さき者たちです」。そして、召命が自らの力に頼るのではなく、神への

信頼に依拠するその内なる場所を大切にしよう彼らを招いた。「知恵があったから福音を理解したのではなく」、「小さくなったからこそ」理解したフランシスコの体験から、兄弟 Massimo は修道会の歩みは効率性から生まれるのではなく、謙遜をもって抱かれた生活様式から生まれるのだと指摘した。

大聖堂での祝いは、アンダー・テンの兄弟たちの行程を「聖フランシスコ過越第8百年祭」と結びつけることを可能にした。その内省において総長は、フランシスコが「貧しく、裸の地に横たわり、死を姉妹と呼びながら死んだ」こと、そして彼が主の過越を単に受け身で経たのではなく、それを生きたのだということを想起させた。このため、彼の墓の前でミサを捧げることは、今日においても十字架が福音的生活の形態であり続けていることを兄弟たちが認識するのを助けた。「くびきが軽くなるのは、重みが減るからではなく、私たちがもはや一人でそれを担うのではないからです」この確信から、兄弟たちは小さき、十字架、そして喜びから再び始めるよう呼びかけられた。

ミサの後、兄弟たちは言語のグアループごとに編成されたフランシスコ大聖堂のガイド付き見学に参加した。見学はコンベンツアル小さき兄弟会 (OFM Conv.) の兄弟たちによって案内され、その壁面が語る霊的、歴史的、そして芸術的な豊かさを参加者が発見するのを助けた。

ドームス・パチスに戻った後、金曜日のグループワークと全体会議での議論を通して準備された提案の承認をもって午前が続けられた。こうしてグループで行われた作業は、Entity、諸管区協議会、および次の総集会に委ねられるべき共通の形態を見出した。

午後、兄弟たちは最終メッセージについて投票を行い、評価演習に参加した。その後、彼らは総長の最後のあいさつのために再び集まった。兄弟 Massimo は素朴な言葉で始めた。「ありがとう」。同氏は神に感謝し、五大陸から集まった参加者、総理事会、集会を準備し活性化した人々、翻訳者たち、そして集会を温かく受け入れたセラフィム管区に感謝を述べた。聖フランシスコ過越第8百年祭の年に、同氏は兄弟たちがアシジに「草創期の新鮮さのようなもの、すなわちマット（むしろ）の上に座り、福音によって形作られ、共にいることの喜びを持った兄弟たち」をもたらしてくれたことを認めた。

総長はこの日々の中で聞かれたことの共鳴を集め、参加者の召命の物語から語り始めた。同氏は多くの物語の中に同じ糸が現れていることを想起させた。それは、本物で喜びに満ちた兄弟との出会いであり、人々に寄り添う素朴な兄弟愛との出会いである。「あなたがたの誰も、演説によって獲得されたものではありません。あなたがたは一つの生活様式によって引き寄せられたのです」と同氏は述べ、自らの召命において幸せである兄弟の宣教ほど本物である召命司牧はないのだと強調した。自分自身を信頼する以上に、神が兄弟一人ひとりを信頼してくださっているのだということを学ぶ場所として提示されたのである。

グループでの識別を経て、兄弟 Massimo は歩みのための3つの指針を委ねた。「中心（核心）を大切にすること」「兄弟的絆を養うこと」特質、そして「私たちの人間性を守ること」である。祈りは動機を清め、新たな眼差しをもって現実へと呼び戻す場所として提示され、兄弟愛は判断される恐れなく疲労や危機、傷について語ることでできる家として、そして私たちの人間性は、今日のデジタル文化において特に緊急を要する課題として示された。人工知能や新しい技術的言語に直面する中で、総長は「どのようなアルゴリズムも、主の前に過ごす時間や、出会いの具体的な人間性を取って代わることはできない」と想起させた。

締めくくりのあいさつにおいて響き渡った言葉の一つが、修道会の「国際性」であった。多くの言語による祈りを聞き、兄弟たちがお互いを理解するために言葉を探し、異なる文化の歌を分かち合う姿を見て、兄弟 Massimo は「生まれつつある修道会の顔、すなわち国際的で若々しく、多様性に



こうして集会の歩みは、各兄弟会への帰還へと開かれた。総長は兄弟たちに対し、あの日々が単なる美しき思い出にとどまることのないよう、証し人として戻ることを求めた。「計画を持ち帰るのではなく、生活様式を持ち帰りなさい」。その様式は、小さく具体的な身振りから始めることができる。共同体の祈りの時間を新たに生きること、地元の集会での誠実な言葉、高齢の兄弟への忍耐強い傾聴、日々の語学学習などである。これらの身振りの一つひとつの中に、日常の中で福音を現存させる可能性が表現されている。

閉幕の祝いにおいて、内省は「袋も、パンも、金も持たずに」旅立つという福音的形態へと立ち返った。それは奪い取られることではなく、自由として捉えられた。兄弟たちは両手を開き、心を燃やしながらか、あの日々の喜びと、フランシスコとクララの精神においてキリストに従うための新しい火を携えて戻るよう招かれた。

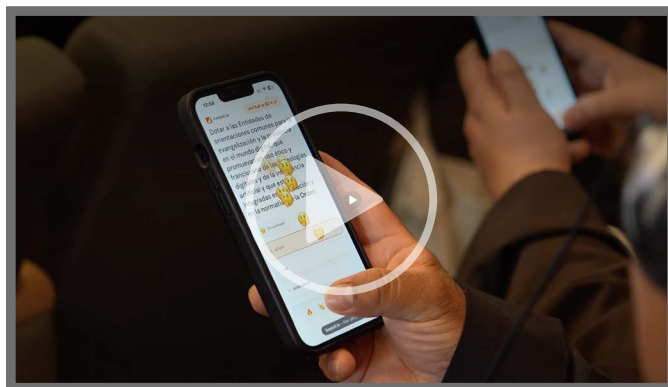
修道会の兄弟たちのための最後の祈りの後、救いのしるしであり聖フランシスコの記念であるタウの祝福が行われた。アシジの木材を用いて地元の木工職人によって作られたタウの十字架は、所屬と使命の素朴なしるしとして授けられた。同じ精神において、ファシリテーター、グループの書記、翻訳者、広報チーム、準備委員会、そして家族的な雰囲気を作り出すのを助けたすべての人々など、この体験を可能にしてくれた人々への感謝が表された。

第6回アンダー・テンの幕屋の集会の公式な閉幕宣言をもって、アシジで生きられた体験はその完

結を迎えたが、その実りは終わらない。「私たちの審議は終了しましたが、私たちの作業はまさに始まったばかりです」と、諸管区、管区代理区、財団、そして各種事業への帰還を前に想起された。聖フランシスコに着想を得た言葉が、最後の命題として遺された。

「兄弟たちよ、善を行い始めましょう。私たちは今までは、ほとんど何も、あるいは全く何もしなかったのですから。」

貧者の眼差しのもと、兄弟たちは自らの召命を、教会と世界の中で素朴さ、小ささ、そして希望をもって生き続けるよう呼びかけられた。



Minister General's homily

Minister General's concluding greeting

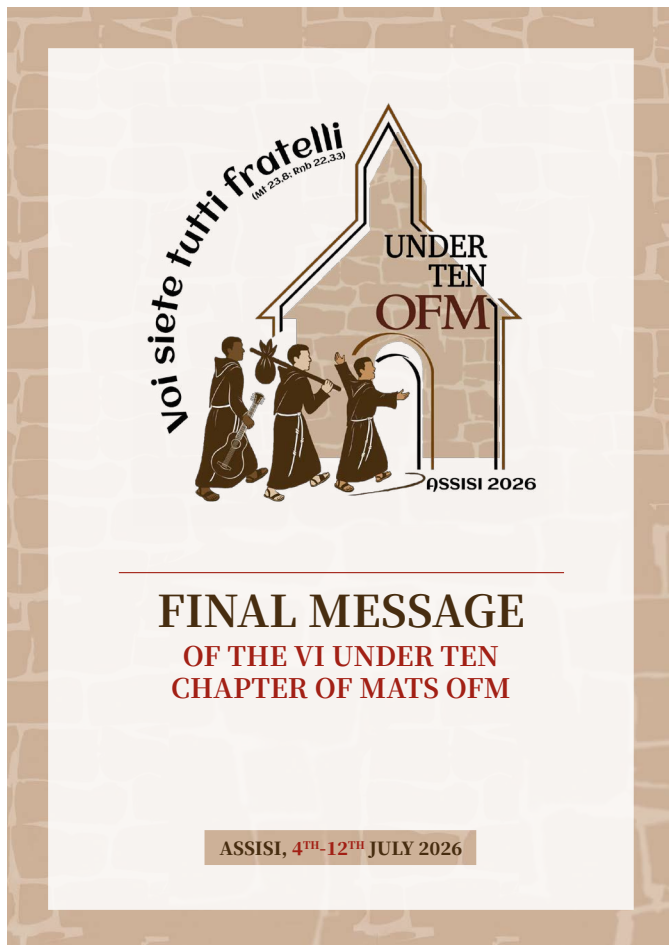
**集会のすべての写真は、
Flickr フォトギャラリーでご覧いただけます ●●**



第6回アンダー・テンの幕屋の集会 最終メッセージ



WWW.OFM.ORG



フランシスカン家族がアジジの聖フランシスコの
帰天800周年を祝う今年、わたしたち、世界五大陸
からこのアジジに集まった、荘厳誓願を宣立して
から10年未満（アンダー・テン）の小さき兄弟会
員たちは、総長の兄弟Massimo Fusarelli、副総長
の兄弟Ignacio Ceja、総理事会の兄弟たち、兄弟
として迎えてくださったアジジの聖フランシス
コ・セラフィム管区、そして「あなた方は皆兄弟
である」というモットーのもとで開催された第6回
アンダー・テンの幕屋の集会において普遍的な兄
弟性の素晴らしい経験に参加する機会を与えてく
だされたわたしたちの管区長や分管区長の皆様
に、心から感謝をささげたいと思います。

至高で全能で善良な主は、わたしたちを聖フラン
シスコと聖クララが生まれたこの地に呼んでくだ
さいました。わたしたちは、聖霊がいま本会に語
りかけてくださっている声とともに耳を傾けるた
めに、それぞれの管区や分管区等の代表として、
他のアンダー・テンの兄弟たちの顔、喜び、傷、
問い、希望をたずさえて、ここに集まりました。

この数日間、わたしたちはみ言葉とともに祈り、
一緒にミサに参加し、自分たちの召命の物語を語
り、現代の課題について対話し、聖フランシスコ
が生活様式としての福音を発見したさまざまな場
所を巡りました。こうして、わたしたちは、聖フ
ランシスコにならってキリストに従うという願い
を新たにしながら、自分たちの召命と使命のフ
ランシスコ会的な源泉に立ち返りました。

わたしたちは、各自の召命の物語を分かち合う
なかで、真実で喜びに満ち、人々に寄り添う兄弟
たちのあかしを通して、神がいまも呼びかけ続け
ておられることを認識しました。信頼できるフ
ランシスコ会的な生活は、新たな召命を惹き寄せる
だけでなく、その召命に同伴してこれを忠実に支
えていくことのできる、第一の召命司牧です。わ
たしたちは、共同の識別のなかで、わたしたちの
兄弟的な生活の福音的な特性のうちに主との個人
的な関係および共同体的な関係を新たにすること
こそが、今日主がわたしたちに呼びかけておられ
る最初の回心であると気づきました。わたしたち
は、事業を拡大したり、新たな課題に対処したり
する前に、祈り、傾聴、相互的な配慮、共同責
任、奉仕を通して、わたしたちの共同体を自分た
ちが真に兄弟であることを表現する場としなが
ら、兄弟性のうちに生きる福音へと回帰するよう
呼びかけられています。

わたしたちは、この同じ歩みのなかで、わたし
たちのもとで権威が真に福音的となるのは、奉仕
として実践されている場合のみであることを認識
しました。兄弟性の交わりのしるしとなることが
求められる修道院長の奉仕を始めとして、権威の
奉仕とは、それぞれの兄弟の尊厳を大切にし、決
定を行なう前に傾聴し、共同責任を促進し、配慮
と同伴の文化を育む寄り添いなのです。

わたしたちは、活動至上主義、個人主義、表層
的なコミュニケーション、癒えない傷、聖職者中
心主義、世代間のギャップなど、わたしたちの共
同体内で生じている緊張について認識していますが、
それと同時に、わたしたちが聖霊の導きによ
って変われるならば、共同体は福音宣教する力
を取り戻せることも発見しました。わたしたち
は、自分たちの共同体が単なる構造ではなく、
「家」となることを望んでいます。そこでは、そ
れぞれの兄弟が、裁かれるのを恐れることなく、

信頼のうちに自身の疲れや危機、傷を表明し、必要がある場合には専門家の助けも借りながら同伴を受け、癒やされることで、やがて自らも他者に同伴することができるようになります。

また、わたしたちは、貧しい人たち、移民、暴力の被害者、わたしたちの共通の家、デジタル文化のなかで意味を求めている人たち、そして希望を失って生きる人たちといった、現代の辺境についても考察しました。わたしたちは、人類が苦しんでいる場所、信頼できる言葉や一貫した生活や人々の心に届く力をもった言語によって福音を宣べ伝える必要のある場所で活動していくために、福音宣教すると同時に自分自身も福音化する、わたしたちの宣教召命を新たにしていきたいと望んでいます。

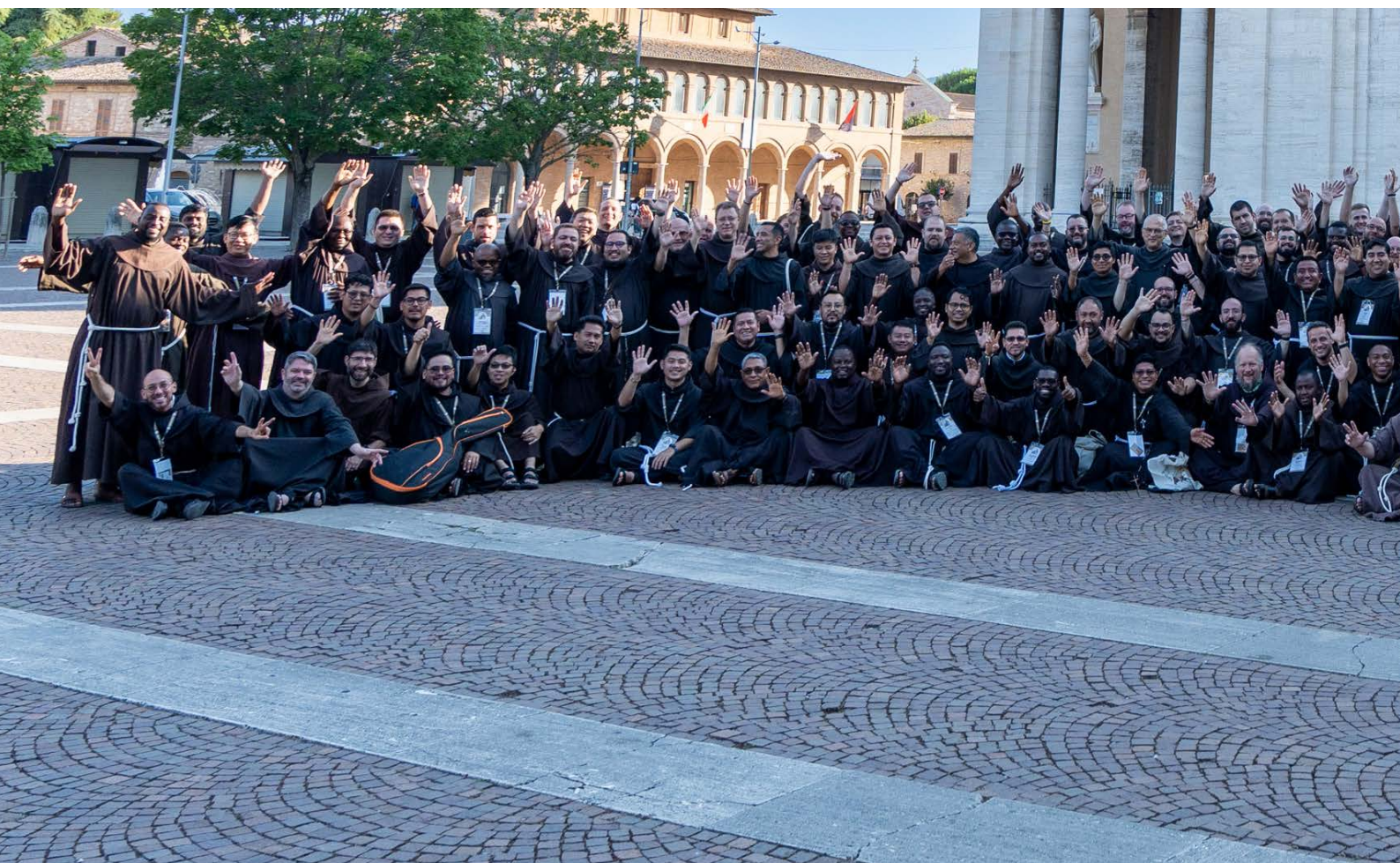
聖霊は、デジタル文化、人工知能、被造物の保全こそが、わたしたちが福音を生き、宣べ伝えるよう呼びかけられている領域であることを気づかせてくださいました。わたしたちは、これらの分野において、謙遜で、兄弟的で、観想的なフランシスコ会的な活動を展開していくことを望んでいます。それは、常にわたしたち自身のことよりも先にキリストを宣べ伝え、技術を責任と節度ともに用いられる人と宣教に奉仕する道具とし、わた

したちは、福音的な生活のあかしこそがもっとも信頼できる福音の告知であるということを確認しながら、ますます相互の結びつきを強めていくこの世界において、出会い、真の個人的な関係、希望、交わりを生み出すことのできる兄弟でありたいと願っています。

わたしたちは、この歩みを支えていくために、祈り、兄弟性、宣教、人間的な成熟を統合する初期養成および生涯養成の必要性を感じています。それは、権威の奉仕、識別、共同責任について教育し、デジタル文化における成熟した福音的な活動を準備するものでなければなりません。

わたしたちは、聖霊が本会に創造性、宣教への情熱、希望を与え続けてくださることを信じています。2027年の総集会が近づいてきたいま、わたしたちは、共同責任の精神で、この第6回アンダー・テンの幕屋の集会でなされた識別の実りを提示したいと考えています。そのため、わたしたちの生活と使命の刷新のためのささやかな貢献として、祈り、み言葉の傾聴、兄弟的な対話、神のみ旨の共同の探求から生まれた以下の提案を発表いたします。

管区・分管区等に向けた提案：



1) 「アンダー・テン」の兄弟たちのために、人間的で、兄弟的で、宣教的な個別の同伴プログラムを通して、本会の多様な文化的現実がもたらす課題やメンタルヘルスや包括的ケアにまつわる課題にも対応できる、質の高い生涯養成を強化すること。

諸管区協議会に向けた提案：

1) 兄弟たちの交流プログラム（長期滞在を含む）、共同養成プロジェクト、司牧および宣教プロジェクト、経験の分かち合い、言語学習などを通して、管区や国の垣根を超えた協力を確立すること。

2027年総集会に向けた提案：

E1) 各諸管区協議会からの「アンダー・テン」代表の総集会参加を推進すること。

2) デジタル世界の課題に適切に対処し、人工知能の倫理的で責任ある利用を促進するために、『養成綱領』を『福音宣教綱領』に沿って改訂すること。

わたしたちは、この第6回アンダー・テンの幕屋の集会の終了後、フランシスコ会の召命がいまもなお美しく、意義深く、必要不可欠であることを確信しながら、聖福音を生きるという新たな決意を胸に、それぞれの共同体へと帰っていきます。わたしたちは、「あなた方は皆兄弟である」という唯一の確信を心に抱きながら、諸天使の女王マリアとともに、また、わたしたちの師父聖フランシスコと聖クララの保護のもと、それぞれの地へと戻ります。

Pax et Bonum !

「アンダー・テン」の兄弟たち一同
総長および総理事会とともに

Download PDF:

[Italiano](#) - [English](#) - [Español](#) - [Deutsch](#)
[Français](#) - [Hrvatski](#) - [Polski](#) - [Português](#)

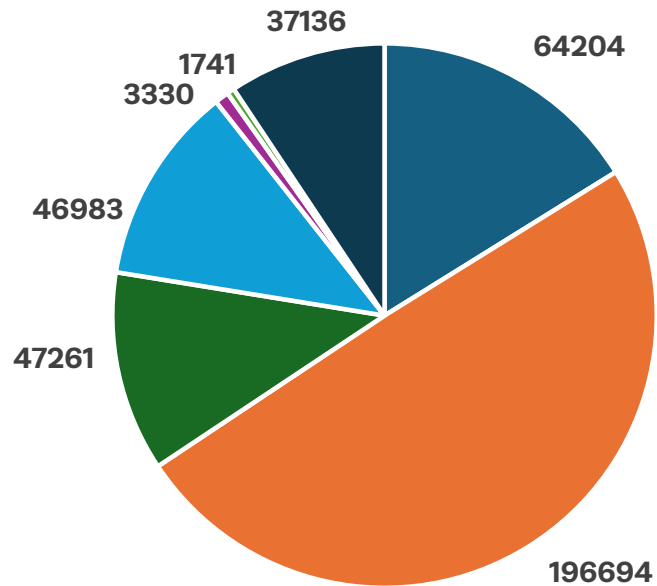


統計表

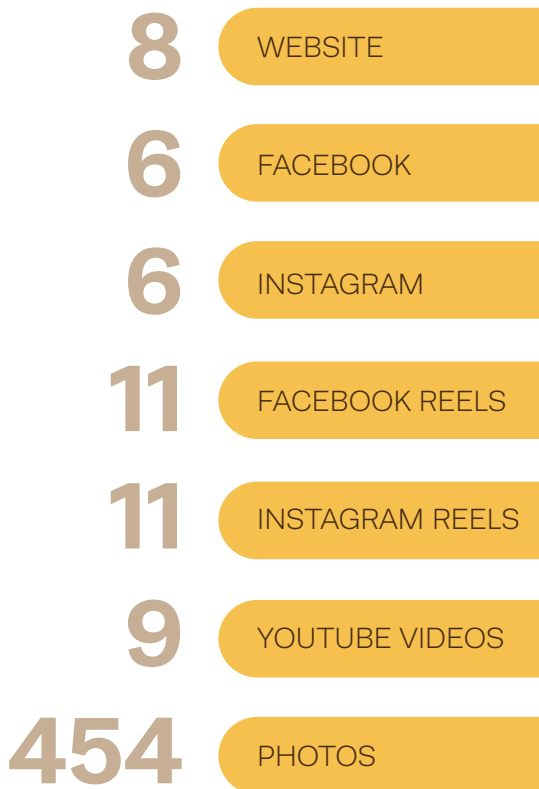


#UNDERTENOFM

VIEWS

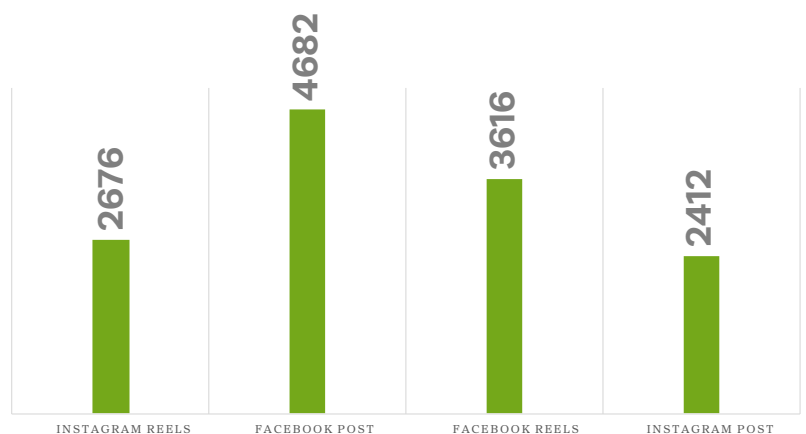


PUBLICATIONS



■ Facebook Reels
 ■ Facebook Post
 ■ Instagram Reels
 ■ Instagram Post
 ■ Website
 ■ Youtube
 ■ Flickr Photos

INTERACTIONS



Subscribe

Write usWrite us

Web

Follow us



Newsletter



comgen@ofm.org



www.ofm.org



@ofmorg



@fratrumminorum



@ofm.org

Curia Generale dei Frati Minori
Via di S. Maria Mediatrix, 25
Roma, Italia

Director: Br. Byron A. Chamann Anléu OFM
Translators: Br. John Luke OFM, Br. Jimmy Zammit OFM, Br. Daniel Cavalieri OFM

OFM
Ordo Fratrum Minorum
© 2026 All rights reserved